

---

# 残酷流星少女

殺狂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

残酷流星少女

### 【Nコード】

N5224Z

### 【作者名】

殺狂

### 【あらすじ】

自分嫌いでしょうっちゅう自殺する少女と、それと関わる人たちのお話。自己満足長編ですので、ご了承ください。

## とある魔女と少女

それは遠い世界のお話。

「もしも、三つ願いが叶うとしたら、何を願いますか？」と、とある魔女は問いを投げた。まだ、10歳にも満たぬ小さな少女に。

少女はすかさず、こう答えたという。

「一つ目、自分が死んでも誰も哀しまない世界。  
二つ目、世界が平和で幸せになること。  
三つ目 過去をやり直すこと」

はたして、魔女はそれを叶えたのか？

それとも、魔女はそれを叶えることを否定したのか？

それは、誰にも分らない。

ただ、一つだけ分かるのは・・・。

少女が自分の存在を否定していることだった。

# とある少女と少年

過去の過ちは、いつだって私を苦しませてきた。

笑っているときに、  
脳裏のうりに大勢の声がするのだ。

「何故おまえだけが笑っていられるんだ？」

「最低。人殺し」

「おまえなんて死んでしまえばいいのに」

別に否定はしない。……それが真実なのだから。

過去の過ちを、やり直すことは出来ない。

だから・・・それを認め、償いとして死者の望んでいることをするだけだ。

それが……彼らのためなら……。

II		II
II		II
II		II
II		II
II		II
II		II
II		II
		II
		II
		II
		II
		II
		II
		II
		II
		II
		II
		II

並盛中学校。最上階、屋上。

フェンスを飛び越え、自殺しようとする少女がいた。

彼女の名前は倉橋桜子。学校では厄介な問題児であった。

それは暴力的なほうではなく、彼女の行動であった。

あるときには、リストカットしてみたり。あるときには、家庭科室の包丁で心臓を刺そうとしてみたり。

あらゆる自殺表現を、生徒・教師の前でやってのけるのだ。

そして、今まさに、飛び降り自殺をする気なのだ。

細く白い腕が、フェンスの縁から離れる。

そして、体をゆっくりと前に傾け、足を踏み外し  
「桜子ちゃん!」

扉が開き、一人の少年が入ってきた。

桜子はゆっくりと振り返り、少年を見る。

「沢田……」

少年は桜子に近づくと、怒った顔をし、こう言った。

「いい加減やめろよ!そんなくだらないこと!」

だが、少女は表情を変えず、言葉を返す。

「……私が死ななきゃ、彼らの望みは叶えられないんだよ……」

桜子は思い出すような顔をし、ふっと表情を曇らせる。

「・・・いいから。早く降りて」

「・・・」

渋々《しぶしぶ》フェンスから降り、少年の顔を見る。そして、少年を睨むと、こう言った。

「次には見つからないように死んでやる・・・」

「死なせないよ」

少年はすかさずこう言う。

桜子は顔をしかめると、また問う。

「何故・・・何故止めるんだ？沢田には関係ないだろう？」

少年はしばらく黙って、こう言った。

「・・・大事な友達だから・・・かな。それと」

とても小さな声で、少年は言った。

「？なんて言った？」

桜子には聞こえなかったようだ。

「・・・なんでもない」

首を振ると、少年は桜子の手を持って、走り出した。

## とある三人組

教室に帰ると、いつものように二人の青年が喧嘩していた。

帰国子女でキレイやすいの獄寺隼人と、野球好きで天然な山本武だ。

二人は沢田と私が教室に入ると、喧嘩をやめ、話かけてきた。

「お帰りなさいませ！10代目！！」

「う、うん。ただいま、獄寺君」

「桜子もおかえりなのなー」

「・・・ん」

適当に返事をし、自分の机の中からメモ帳を取り出す。

書かれているのは今までに行った自殺の方法。

達成出来なかったものには×印はっを入れ、理由もちゃんと書いてある。

今日は「飛び降り自殺」が出来なかったから、書き入れところ  
う

今までにも、かなりの自殺方法を実行したが、殆どほととが止められた。

そして、止めた人物がさっきの3人。沢田、獄寺、山本。



3人は私が自殺したいのを知っていても、必ず止めてくる。

正直言つて・・・うざったい。

他人の人生にどうこう口出ししてほしくない。

それが・・・私の思つてること。

「おい！倉橋！聞いてんのか！？」

突然の大声に、私は我に返る。

「・・・聞いてない」

「ったく・・・10代目が遊びに誘つてやつてんだぞ？」

「どちらにしろ・・・私は遊ばない」

「おまえ・・・10代目が折角忙せつかくしい休日に遊んでくれるというのに・・・」

「ご、獄寺君・・・」

「知らん。第一、誘われた本人が断っているんだ。何故無理やり遊ばせようとする？」

私は、獄寺が好きだ。友達として。

よく私につつかかってくる。私が何か言えば、ムカついてまたつかかる。子供のような奴だが、こういう奴のほうが嫌ってくれるだ

ろう。

逆に山本は苦手だ。能天気で、勘違いばかり。何か言っても笑って返す。言動をまったく気にしない人間は苦手だ。

沢田は嫌い。私がキツイ言葉を投げつけても、アイツは「大切だから」と言っ、何も聞かない。優しいのはいいことだが、私にとつては悪魔のような奴だ。

と、いうわけで、3人の友達にも、このように三つの種類に別けられてい、改めて実感するのであつた・・・。

## とある帰り道（前書き）

今回は短めです。

## とある帰り道

帰り道・・・私が唯一独りになれる時間。

家の近くの公園には、小さな子供がたくさんいた。

あの子達を全員殺して捕まったら・・・。

ふと、そんな考えが頭によぎり、慌てて打ち消す。

私は自分一人が死ぬだけでいい。なんにも他人を巻き込むことはない。

それも・・・まだ長い未来がある小さな子供を・・・。

そして、また自殺の方法に思い耽<sup>ふけ</sup>る。

そうだな・・・何にしようか・・・。

あんまり人目がなくて、自殺しやすい所がいいな・・・。

そういえば・・・黒曜のヘルシーランドだっけ・・・。

あそこは建物が崩れてるしな。うまく行けば落下して死ねるかもしれない。

そうだな。それがいい。そうしよう。

いざ、黒曜に出発。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5224z/>

---

残酷流星少女

2011年12月20日18時54分発行